

# 嵯峨宮頼り

第10号

嵯峨宮：群馬県みどり市大間々町小平 348 番地

発行日：2020年3月27日

発行：嵯峨宮世話人会

「神頼み」したいとき

新型コロナウイルスの感染爆発が対岸の火事ではなくなった。疫病の怖さは書物の中でしか知らない。危機に遭遇して生き残れるのは臆病者で、恐れ、最悪の事態に備えた者に限る。それは神にすがる姿だ。ノーベル賞受賞者山中伸弥氏は言っている。「新型コロナウイルスはすぐそこにいるかもしれないと自覚することが大切です。桜は来年も必ず帰ってきます。もし人の命が奪われたら、二度と帰ってきません。」

## 花咲く季節

揺れる足元の\*さくらさう、眼下に舞うサクラ吹雪、パッチワークの山に点ずる山桜、山頂に谷ツ山城址あり、鞍部に桜峠あり、昔人は夢見て峠を越えた、花咲かせた者、帰らぬ者、峠に散った者あり、今峠に道

なく越す人なし、それでも嵯峨宮は小平の里を、後方の峠を、見つけける。

\*この地区ではカッコソウのことをサクラソウと呼んでいました。



嵯峨宮から見える 花咲く小平の里

疫病と闘う人類の歴史  
↳ 新型コロナウイルス  
感染拡大に思う

古今東西を問わず人類は疫病との闘いであった。先人は命を賭してそれを記した。我々はそれを書物から探り学ぶ事が出来る。

旧約聖書のモーゼの出エジプト記に疫病の記述

がある。BC14〜13世紀の話で古代エジプトで虐げられているユダヤ人をエジプトから脱出させた一節である。

そこで次の日イスラエルの民は言葉には出さない興奮の中で、モーゼの指示通り主なる神の命じたことを成し遂げた。各家族は産まれて一年になる斑や傷のない雄の子羊を選んで殺した。血は鉢に集めヒソップ（やなぎはっか）の枝で自分の家の側柱や鴨居に塗った。子羊の肉をあぶった。夜になると家の中で子羊の肉を、パン種を入れないうちと苦菜とともに食べた。・・・

夜中になると「破壊するもの」が放たれた。主の使いがエジプト中を回ったのだ。側に柱に子羊の血が塗られた家は通り過ぎていった。しかしその他の家は開かれていたので神の使いは中に入り、出てきたときにはその家の長子は死んでいた。黄金の王座にすわるファラオの長子か

ら監獄の囚人の長子に至るまで、主はエジプト中の長子を討った。すべてを。

日本昔話にも似た話がある。備後国風土記、蘇民将来（そみんしょうらい）の話だ。

昔、武塔神は旅の途中一夜の宿を里の金持ちである巨旦将来（こたんしょうらい）に願い出るが、武塔神の質素な身なりを見て意地悪く断る。武塔神は困り、さらに宿を探して蘇民将来の家に辿り着き宿泊を願い出る。蘇民将来は「うちは貧乏ですが、それでもよければ是非」と、粟柄（あわがら）で心づくしのもてなしをする。武塔神は蘇民将来の優しい心に感激し又旅に出る。その後、武塔神は国に戻る途中、「蘇民将来にあの時のお礼をしよう」と再び里を訪れ、蘇民将来に会い「子孫はいるか」と尋ねる。「妻と娘が一人」と答えると、「ではその妻と娘に茅（かや）で輪を作り、その輪を腰の上につけさせるように」と伝える。

するとその夜、茅(も)の輪をつけていた蘇民将来の娘以外の里人は皆疫病によって死んでしまった。



その後武塔神は蘇民将来の娘のもとを訪れ「私は実はスサノオという神だ。後の世でも厄災を避けるため『私は蘇民将来の子孫である』と名乗り茅の輪を腰につけよ。そうすれば今後も疫病から逃れることができるだろう」と。

欧州では十四世紀黒死病(ペスト)が大流行し、全人口の半分が死亡したといわれている。ネズミと蚤により伝染した。グリム童話「ハーメルンの笛吹き男」はこれが背景にある。



昔ドイツのハーメルンと言う町に沢山のネズミが住み着き町の人々は大変困っていた。壁に穴をあけ食べ物やゴミをくいあらし、夜になると天井裏を走り回る。人々は眠れずほとほと困り果てていました。そこで町長はネズミを退治したものに金貨百枚を与えるとお触れを出し、次の日一人の男が町に現れ「私が町のネズミを退治する」と申し出すぐに持っている笛を吹き始めた。すると笛吹き男のあとからネズミの大群がゾロゾロついて行き、町外れの川まで来るとネズミたちは一匹残らず川に飛び込み溺れ死んでしまった。町の人は大喜びした。「では約束の金貨百枚を下さい」と笛吹き男は町長に言ったが人々は「この男はただ笛を吹いていただけで何もしてない」と。「皆の言う通りだ。お前に払う金貨はない」と町長は男を追い払う。「約束を破るなら違う曲を吹くことになるぞ」と男は出て行った。

その夜どこからか笛の音が聞こえると、子供たちが皆出て来て踊りながら男の後をついて行って誰も戻らなかつた、と。

スペイン風邪はアメリカ生まれのインフルエンザだった。

第一波は第一次世界大戦中の1918年3月合衆国カンザス州のファンストン基地から始まり、ヨーロッパ西部に到着のアメリカ軍兵士らがウイルスを運んだ。戦時中の検閲官は士気を維持するために、ドイツ、イギリス、フランス、米国での病気や死亡の報告を最小限に抑えた。一方新聞は中立国スペインでの伝染病の影響を自由に報道することができたためスペインが特に大きな被害を受けたという誤った印象を与え「スペイン風邪」を生み出した。日本でも国民の四割2300万人が感染し39万人が死亡した。

蚕の疫病が日本の絹産業を隆盛にした。

江戸末期の1859年横浜開港により生糸輸出が増加し、翌年には国内で生産される生糸の半分以上が輸出された。横浜は産地の信州諏訪地方や上州前橋地方から比較的近く、開港後わずか一年で重要な輸出品となり1862年には日本の輸出品の86%が生糸と蚕種になった。それは十九世紀中期ヨーロッパで蚕の病気(蚕微粒子病)が大流行し壊滅状態に陥ったため、イタリア・フランスではアジア諸国から生糸や蚕種を輸入して絹織物の生産を続けた。

その名残で桐生には横浜銀行支店が存在する。

大間々町誌通史下には大正6・昭和3年の「福岡村」人件費支出から見た行政機構「図」が記載され、伝染病予防と隔離病舎という二つの組織があった。福岡村がここ迄せざるを得

ないことに疫病の恐ろしさを感じるのと共に先人に敬意を表する。その後昭和9年大間々町・福岡村・川内村共同で伝染病隔離病舎を設置し、経費節減を図ったようだ。現在はもつと広域で技術の高い専門病院や大病院があり、何かあれば救急車で入院でき手当されると思っていた。しかし今回の新型コロナウイルスでは37.5度で4日間自宅待機しなければ検査すらしてもらえない。その間家族に伝染するのは必至だ。百年前は隔離するだけ、今は隔離すらできず家族に伝染させてしまう。未知の疫病に昔も今もお手上げだ。(阿直)

